

札幌学院大学 総合研究所紀要 投稿規程

1. 札幌学院大学 総合研究所紀要 (ISSN: 2188-4897) に投稿できる論文は、情報科学, 自然科学, 言語学, 教養教育, FD (ファカルティ・ディベロプメント), 教職研究の各分野とし, これら領域の研究や教育に関する内容を中心とする。
2. 本誌に掲載する論文の種類は, 「原著」, 「論文」, 「研究ノート」, 「総合報告」, 「調査報告」, 「資料」とする。原著は独創性があり実証的または理論的な論文とする。論文と研究ノートは理論的發展や定理の証明, 既存の手法の改良など, これまでの理論等に対して新しい視点を入れる論文とする。総合報告は当該分野を広い視野から総合的にまとめたものとする。調査報告は各分野の方法の適用を通じて, 主に実証的な観点から知見を提供する論文とする。資料は各分野で集められた公表に値する貴重な資料やデータを掲載する論文とする。
3. 論文の原稿は, 日本語または英語とする。日本語 (英語) の場合は, 日本語 (英語) による表題, 要約, キーワード, 英語 (日本語) による表題, 要約, キーワードを付ける。
4. 投稿する論文は, 未公開のものに限る。
5. 論文投稿者のうち少なくとも1名は所員であること, あるいは編集委員会が認めた者であること。
6. 投稿原稿は, 別に定める執筆要項にしたがって作成する。
7. 論文は図・表・要約等を含めて Word 等の電子的ファイルで提出する。その際に論文の区別を申請する。
8. 原著は当該研究分野の2名以上による査読を経て, 編集委員会が採否を決定する。
9. 論文と研究ノートは, その内容に応じて著者が選択をする。
10. 著者校正は初校のみとし, 校正の際の原稿への加除は認めない。
11. 掲載された論文は, 著者に電子ファイル (PDF 形式) を贈呈する。
12. 掲載された論文の著作権は, 原著は札幌学院大学に, それ以外の論文は本人に帰属する。

札幌学院大学 総合研究所紀要 執筆要項

1. 記述は簡潔かつ明瞭とすること。日本語の場合は現代かなづかい, 常用漢字とする。
2. 和文要旨は500字以内, 英文要旨は300語以内とする。また, 5個以内の日本語と英語のキーワードをつける。要旨ページを含めて10ページを目安とし, これを大幅に上回らないこととする。ただし, 総合報告は20ページを目安とする。
3. 句読点は「,」と「.」を用いる。
4. 本文の章・節等の記号は, 章にあたるものを1., 2., …とし, 第1章第1節にあたるものは1.1とする。以下これに準ずる。
5. 文章中の数式の文字はすべてイタリック (斜体) とする。ただし, sin, log などの関数記号は直立体とする。必要な数式には (1.1.2) (第1章題1節中の2番目の数式の場合) のように, 数式の後に番号をつける。あるいは一連番号でもよい。
6. 脚注は一連番号を参照箇所⁽¹⁾の右肩に^(1,2)のように添え書きし, 参考文献のあとにその内容を書く。
7. 図・表は鮮明なものを各自用意する。
8. 図・表の挿入希望箇所を原稿内に指定するか, 各自レイアウトした原稿を作成する。
9. 日本語の論文では本文中の外国人名等の固有名詞は, 原綴りあるいは英語綴りを原則とするが, 公式の名称等として著名なものはカタカナでもよい。
10. 本文中の参考文献の引用は次の通りとする。著者が2人の場合は和文献では中黒「・」で, 欧文献では「&」でつなげる。3人以上の場合には第1著者の姓を書き, 和文献では「他」, 欧文献には「*et al.*」を書き添える。

(例)

加納・市村 (1990) は…

Kao & Yan (2001).

Little *et al.* (1989) は…

…と述べている (Little *et al.*, 1989).

…と論考している (中村 他, 2008; Nakamura *et al.*, 2015).

11. 参考文献は、欧文と和文のものを混在させて、著者の姓のアルファベット順で並べる。同一著者の同年公刊の文献は年号の後ろに、*a*, *b*, *c*, …をつけて区別する。雑誌などの巻と号の表記は、7巻2号であれば、7(2)のようにする。欧文の書籍名はイタリックとする。雑誌名称は省略せずに書く。ウェブサイトやインターネット上の資料は、

名称 (年). タイトル, URL (年月日, 閲覧)

という形式で記述する。

DOI (Digital Object Identifier) がある場合は、それを明記する。

(例)

- [1] 青木太朗 (2011*a*). 主成分分析とその応用, 日本技術出版, 東京.
 [2] 青木太朗 (2011*b*). 対応分析法の近年の動向, 計量行動科学, 15(1), 101-125.

[3] Bustos, F. M. (1965). A strong score theory with applications, *Psychometrics*, 31(2), 99-111.

[4] 加納雅裕・市村正子 (1990). 因子分析における統計的推測, 計量科学, 18(1), 13-25.

[5] 岡本忠司 (1986). 因子分析の基礎, 日科技研出版, 東京.

[6] Rao, C.R. (1973). *Linear Statistical Inference and its Applications* (2nd ed.), John Wiley, New York.

[7] Rao, C.R. (Ed.) (1989). *Educational Measurement* (3rd ed.). Macmillan. (池田算男 (訳) (1992). 教育測定学, 第3版, ふたみ出版.)

[8] 柴田祐輔 (編) (1991). 項目反応理論, 東京出版, 東京.

[9] Wisher, A.B. (2019). The use of classification error in taxonomic problems, *Annals of Statistical Sciences*, 3(2), 123-134, doi: 10.1234/j.4321-5432.

[10] Zone, A. C. (2018). Viewing Slanted Golton Board, <http://ab-c.com/def.html>, (2018年11月22日閲覧).

12. 英文または英文要約は、最終稿までに専門家の校閲を受けることを要する。